小林秀雄著『本居宣長』: 三十章主題《古言の『ふり』〔内にある古人の意（こころ）の外への現れ〕、及び生きた『言靈』の確信に據る、宣長『自主獨往の道』》:その「關係論」的纏め。

①『なべての地を阿禮が語と定めて』（物：場 C ‘）②安萬侶の表記（物：場 C ‘）③古人の『心ばへ』（物：場 C ‘）④古言の『ふり』（物：場 C ‘）⑤『言靈』（物：場 C ‘）⇒からの關係：先づ、①、仕事は始まつたのである。『阿禮が語』を『漢（から）のふりの厠（まじ）らぬ、清らかなる古語』と定めて、といふ意味だ。②が、今日となつては、もう謎めいた符號に見えようとも、その（②の）背後には、そのままが③であると言つていい、④〔即ち、古人の意（こころ）の外への現れ〕がある、文句の附けやうのなく明白な、「❻：生きた⑤の働き（即ち、轉義D1の至大化）といふ實體が在る、それを確信する事によつて、⑧の仕事は始まつた」（D1の至大化）⇒「⑦：自主獨往の道」（❻的概念F）⇒E：其處〔③④：⑤の働きの實體〕に到達出來るといふ確信、或は到達しようとする意志が基本となつてゐる（Eの至大化）と見做さないと、⑧の學問の『ふり』〔とは『内にある古人の意（こころ）の外への現れ』を訓む事。參照例⇒「宣長の學問の方法の具體的な『ふり』の適例」P287〕といふものは、考へにくいのである。さういふもの〔③④：⑤の働きの實體、に到達出來るといふ確信・意志〕が、嚴密な研究のうちにも、言はば、⑦をつけてゐるといふ事があるのだ」（⑦への距離獲得：Eの至大化）⇒⑧宣長（△枠）：①③④⑤への適應正常。

《古事記傳』完成時詠歌：古事（ふるごと）の　ふみをらよめば　いにしへの　てぶりこととひ　聞見るごとし》 注：『てぶりこととひ』とは、古言の『ふり』の意。
①倭建命の『言とひ』（物：場 C ‘）⇒からの關係：①は、「❷：④の意（こころ）に迎へられて（即ち、轉義D1の至大化）、」⇒「③：しつかりした應答」（❷的概念F）⇒E：「『如此（かく）申し給へる御心のほどを思ひ度（はか）り奉るに、いといと悲哀（かな）しとも悲哀（かなし）き御語りにざりける』といふ、③（：古言の『ふり』）を得る（即ち、合體Eの至大化）までは、息を吹き返した（即ち、合體Eの至大化）ことなど、一ぺんもなかつたのである。古學する者にとつて、古事（ふるごと）の眼目は、眼には手ぶり〔即ち『内にある古人の意（こころ）の外への現れ』〕となつて見え、耳には口ぶり〔即ち『同上』〕となつて聞える、その『ふり』である」（③への距離獲得：即ち、合體Eの至大化）⇒④宣長（△枠）：①への適應正常。

（物：場 C ‘）・・・
①『なべての地を阿禮が語と定めて』（物：場 C ‘）②安萬侶の表記（物：場 C ‘）③古人の『心ばへ』（物：場 C ‘）④古言の『ふり』（物：場 C ‘）⑤『言靈』（物：場 C ‘）
～～～